

Title	届かない知らせ : フランツ・カフカ 『皇帝からの知らせ』
Sub Title	Nie ankommende Botschaft : Franz Kafkas „Eine kaiserliche Botschaft"
Author	新田, 誠吾(Nitta, Seigo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1987
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.51, (1987. 7) ,p.59- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00510001-0227">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00510001-0227</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 届かない知らせ

—フランツ・カフカ『皇帝からの知らせ』—

新田誠吾

## I

### 『皇帝からの知らせ』

何でも皇帝は、おまえ個人にあてて、見下げはてた臣民、皇帝の太陽に畏れをなして、ひどく離れた辺鄙なところへ逃げていったちっぽけな影のおまえに対して、臨終の床から知らせを出したという話だ。皇帝は使いの者を枕元にひざまずかせ、伝えるべきことをその耳元でささやいた。それを自分の耳元でくり返させたくらいだから、よほど重要な知らせだった。間違いないことを確かめる意味で、皇帝はうなずいた。そして、臨終に立ち会っている人たちを前にして——視界をさえぎる壁はすべて取り払われ、外の階段にはこの国の高貴な人々が皇帝をぐるりと囲んでいた——そういう人たちが見守るなか、皇帝は使者に出立を命じた。使者は直ちにその途についた。頑丈かつ疲れなど知らぬ男だ。人の波を手でかき分け、道を開いていく。行く手をふさぐ者があれば、胸にある太陽の紋章を示す。実際、この男ほど楽々と進んでいく者は他にはいない。ところが、人の数はなんとも多いし、その住まいは際限なく続いている。目の前に広々とした平原が開ければ、それこそ使者は飛ぶようにかけてきて、程なくおまえの家の戸を勢いよくたたき音がすることになる。ところがそうなるどころか、何と無駄な努力をしていることか。いまだに一番内側の宮殿にある部屋を駆けぬけているありさまだ。この使者がその部屋を全部駆けぬける

ことはまずないだろう。かりにうまくいっても、何にもならない。階段を降りるのにひと苦労しなければならない。かりにうまくいっても、何にもならない。宮殿の中庭を走りぬけねばならない。中庭のあとには、第二の広大な宮殿がある。ここでもまた階段と中庭、そしてまた宮殿というぐあいに何千年にわたって続いている。そしていよいよ一番外側の門から走り出ることになれば、——だが、そんなことは絶対にありえない——そこがようやく首都の街というわけだ。世界の中心であり、底辺の連中もわんさといふ。ここを走りぬける者などなく、まして死者の伝言を持って通りすぎる者はいない。——ところが、おまえは日が暮れると窓辺にすわって、その知らせが来るのを夢見ているのだ。

## II

はじめに、すでに言い古された表現ではあるが、この作品を考える上で意義のある問いを立ててみよう。「この作品が言おうとしていることは何か」。この問いは、読者の側から言えば、次のようになる。「この作品から何を読みとることができるか」。

『皇帝からの知らせ』(Eine Kaiserliche Botschaft) は、カフカが書き遺した多くの原稿、作品の中でも、生前、著者自身によって題がつけられ、出版されたという意味においては、数少ない作品の一つである<sup>1)</sup>。もともと1917年3月に書かれた段階においては<sup>2)</sup>、別の物語——現在は『シナの長城』(Beim Bau der chinesischen Mauer)<sup>3)</sup> というタイトルがつけられている——の中で、「言い伝え」(Sage) として登場する話であった。カフカはその言い伝えの本文の部分だけを、そのまま抜き出して一個の独立した作品として世に出したのである。

さて、この作品は原文でも2ページにも満たない文字通りの小品である。物語は題が示す通り、皇帝が出した知らせをめぐる進んでいく。皇帝から知らせを託されて使者は出発するが、広大な宮殿のため、一番内側の宮殿からも出ることができない。一方、知らせの受取人の「おまえ」は

その到着を心待ちにしているという話である。すでにこのあらすじの段階でも、読者にはいくつかの疑問が生まれてくる。「一番内側の宮殿はどうなっているのか」、「そもそも皇帝が出した知らせとは何だったのか」などである。物語の記述の方は、きわめて簡潔で、これらの質問に答えるには十分とはいえない。物語は「皇帝からの知らせ」をめぐる進むものの、その内容は知らされず、その上、知らせは届きそうもない。

こうした状況は、「テキストの快樂」<sup>4)</sup>に浸りきれない読者にはきわめて不可解にうつり、全体の見通しもきかない。全体の記述が象徴的にも見えるし、その一方で、意味を探ること自体、作品中の「使者」と同じ無駄な努力をしているようにも思えてくる。こういったカフカの「わかりにくさ」はどこにあるのだろうか。われわれ読者は、それを克服して何か意味をひき出すことが本当に可能だろうか。これらの問題を考察するために、作品の構成と記述の検討から始めよう。

### III

『皇帝からの知らせ』は、筋の上から大きく三つの部分に分けることができる。その切れ目の最初の文は、いずれも逆接の接続詞（aber）を含んだ文で表現されている。

ところが、人の数はなんとも多いし、その住まいは際限なく続いている。

ところが、おまえは日が暮れると窓辺にすわって、その知らせが来るのを夢見ているのだ。

三つに分けた最初の部分では、皇帝が臨終の床から「おまえ」個人にあてた知らせを伝言の形で使者に託し、使者が出発する。第二の部分では、この使者が一番内側の宮殿から走り出せないことがわかる。宮殿の列は延々と首都の街まで続いている。最後の部分では、その知らせを待つ「おまえ」の姿が描かれている。

## (1) 出 発

作品の冒頭は次のやや長い一文によって始まる。

Der Kaiser — so heißt es — hat dir, dem Einzelnen, dem jämmerlichen Untertanen, dem winzig vor der kaiserlichen Sonne in die fernste Ferne geflüchteten Schatten, gerade dir hat der Kaiser von seinem Sterbebett aus eine Botschaft gesendet.

(何でも皇帝は、おまえ個人にあてて、見下げたてた臣民、皇帝の太陽に畏れをなして、ひどく離れた辺鄙なところへ逃げていったちっぽけな影のおまえに対して、臨終の床から知らせを出したという話だ。)

この一文には皇帝が知らせを出したということ以外に、特に語り手との関係で注目すべき点が二つある。一つは、「何でも～という話だ」(so heißt es) という引用の形であり、もう一つは、語り手が知らせの名宛人に対して「おまえ」と二人称でよびかけている点である。

引用に関しては、すでに述べたように、『シナの長城』の中では、直前に「言い伝え」であることが示されている。ところが、この作品では、話の起源、由来については触れられていない。それでも so heißt es とあることで、この話は語り手が作り出した話ではなく(実際には語り手の創作であっても)、すでにそれ以前に成立している話を語り手が「伝える」という体裁で進行していく。したがって、語り手の責任は正確な伝達におかれ、内容の「真偽」や「正当性」にはない。その意味で、この語り手は作品中の使者と同様に、われわれ読者に対して「伝達者」の役割を果たしている。

次に、語り手が「おまえ」と二人称で呼びかける人物について考えてみよう。ここで問題なのは、カフカの作品の登場人物によく見られる固有の名前を持っていないということではない<sup>5)</sup>。むしろ、読者の関心をまずひくのは、二人称が用いられると、読者はほとんど例外なく「対話」の存在を想定することである。この対話には、自己が自己に語りかけるいわゆる「自己対話」(Selbstgespräch) も含まれる。

語り手による二人称使用の典型的な例としては、語り手が物語の枠をこ

えて読者に語りかける場合があるが、読者は皇帝の臣民ではなく、知らせも待っていないので、その可能性はまず排除できる。ここでは、語り手は知らせを待つ臣民に対して「おまえ」とよびかけることで、第三者の立場から脱して、直接的な関係を作り出していると考えられよう。

テキストの記述では、この「おまえ」は皇帝の臣民であり、皇帝の太陽から逃げ出した見下げはてた影のような存在でしかない。強大な勢力を持ち、支配者である皇帝と、その皇帝に支配され、依存する（影は太陽によってできる）「おまえ」とが、階級的な支配・被支配の関係にあることがわかる。

皇帝はそういう「おまえ」にあてて、不特定ではなく、個人にあてて知らせを出したのである。使者を枕元によびよせ、耳元で伝言の内容をささやく。内容はわからないが、皇帝がわざわざ内容をくり返させて確かめるくらいに「重要な知らせ」である。これに加えて、臨終の床という状況が知らせの重要性を強調する。壁はとり払われ、外の階段にはこの国の身分の高い人々が皇帝をとり囲んで見守っている。彼らは一連の経過の「証人」として、この知らせに真実味を与えている。

こうして、皇帝の伝言を「おまえ」に伝えるべく使者は直ちに出発する。あらゆる障害を乗り越えて進む使者として、また他に並ぶ者のいない使者として描かれている。

## (2) 否定

Aber die Menge ist so groß; ihre Wohnstätten nehmen kein Ende.  
(ところが、人の数はなんとも多し、その住まいは際限なく続いている。)

この文から物語は第二の段階へと進む。順調に進んでいくと思われた使者の歩みに、予想外の状況が明らかにされていく。それまでの第一部を「肯定」の世界と呼ぶならば、この第二部は「否定」の世界とすることができる。事実、ここでは、kein, niemals, nichts, niemand といったいわゆる否定詞と接続詞の aber が駆使されて、設定された仮定を次々と打ち

消していく<sup>6)</sup>。

まず、この使者が「広々とした平原」に出れば、まもなく「おまえ」のもとに知らせが届くだろうという仮定が述べられる。この仮定は、それに続く文で否定される。

Aber statt dessen, wie nutzlos müht er sich ab.

(ところがそうなるどころか、何と無駄な努力をしていることか。)

そうして、この使者が実はまだ「一番内側の宮殿」の部屋をかけぬけようとしていることが明らかになる。これに、次の文が決定的とも言える打撃を与える。

niemals wird er sie überwinden.

(この使者がその部屋を全部かけぬけることはまずないだろう。)

今あげた文は、その前の「無駄な努力をしている」「際限なく続いている」といった表現を規定し、相互に補足し合う。これらの表現を厳密にとつて、宮殿の部屋が無限に続くと考えてみよう。無限の状態は、時間や空間の制約を超えて成立する。使者が動いたと言えるには、時間的および空間的位置の変化が前提条件であるから、無限に続く部屋の中では動いたと言うことはできない。それとは別に、いわゆる「誇張表現」(Hyperbel)と考えると、部屋があたかも無限に続くようにあるとしても、「全部かけぬけることはまずないだろう」という一文が、使者から可能性を奪い取ってしまう。

テキストではさらに「仮定」が続く。この第二部における「仮定」は原文ではすべて接続法第二式が用いられ、言外に不可能を表している。その仮定でも「否定」は重ねられていく。宮殿の外には階段、中庭があり、そのあとには第二の広大な宮殿がひかえている。しかもそうした宮殿は延々と「何千年にわたって」(durch Jahrtausende) 続いている。そして「いよいよ一番外側の門から走り出ることになれば」という最後の仮定も、「だが、そんなことは絶対にありえない」(aber niemals, niemals kann es

geschehen) と否定された上で、一番外側の門の向こうにようやく「首都の街」(Residenzstadt) があることがわかる。知らせの受取人である「おまえ」はひどく離れた辺鄙なところにいるから、ここを通りすぎる必要がある。ところが、それも否定されている。

Niemand dringt hier durch und gar mit der Botschaft eines Toten.  
(ここを走りぬける者などなく、まして死者の伝言を持って通りすぎる者はいない。)

ここでも、否定した根拠については明確に示されず、ただ否定だけが行なわれている。

いまだに一番内側の宮殿を走り続けている使者にとってはこうした仮定は無意味に等しい。しかし、読者には一番内側の宮殿から始まって、延々と続く宮殿の列、さらに一番外側の門、首都の街というぐあいに位置関係を示す有益な情報である。しかし、それは同時に知らせが届く可能性を次々と打ち消していく「否定」の列でもある。

### (3) 待 つ

Du aber sitzt an deinem Fenster und erträumst sie dir, wenn der Abend kommt.

(ところが、おまえは日が暮れると窓辺にすわって、その知らせが来るのを夢見ているのだ。)

知らせの受取人である「おまえ」は、知らせが届くのをこうして夢見て待っている。この一文で、知らせが皇帝が一方的に出しただけではなく、その知らせの存在を知って待っている「おまえ」も登場する。

さて、この「窓辺」という場所はカフカにとって特別な意味を持ち、それが作品にも投影されている。作品や手紙からいくつか例をひいてみよう。

一人さびしく暮らしているながら、それでもたまにはどこかで人と知り合いになりたいと思っている人、一日の時間の変化や天気、仕事の具



合といったものの変化を考慮して、誰でもいいから、自分が頼れる片腕となる人にうまく出会えないものかと思っている人——こういう人は、通りに面した窓なしにはやっていけないだろう。

(『通りに面した窓』 Das Gassenfenster)<sup>7)</sup>

彼はちょうど外国にいる幼な友達に手紙を書き終えたところで、遊び半分にゆっくり封をすると、机に肘をついて窓の外の川や橋、そしてやや緑に色づいた対岸の丘といったものに目をやった。

(『判決』 Das Urteil)<sup>8)</sup>

実は、以前からなかなか実現しない望みがあるのです。大きな窓のそばの机にすわって、窓の外は広々としていて、日が沈むころに太陽の光や外の眺めにじゃまされず、本当に落ちついて呼吸しながら静かにねむることなのです。

(グレーテ・プロッホ宛の手紙 1914年5月12日)<sup>9)</sup>

『判決』に書かれてあるように、カフカ自身、自分の部屋の窓からプラハを流れるモルダウ川やそれにかかる橋を眺めていた<sup>10)</sup>。しかもそこは手紙の記述からもうかがえるように、願望と結びついた場所でもあった。こう考えてくると、「おまえ」という呼びかけの中に「自己対話」を読みとる可能性も消し去るわけにはいかない。

しかし、『皇帝からの知らせ』を読み進んできた読者には、知らせが届くのを「夢見る」行為は、もはや希望に満ちたものには映らない。知らせを待つという行為は、知らせが届く可能性が前提となっているが、その前提は第二部で、徹底的に否定されているためである。

## IV

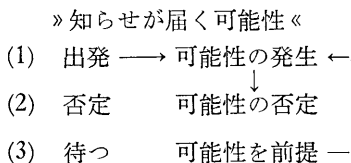
これまでの考察をもとに、この作品の問題である「皇帝の出した知らせが届かない」ということについて考えてみよう。

すでに考察した通り、届かないということで中心的役割を果たしているのが第二部における「否定」である。ここで否定されているのは、知らせ

そのものの存在ではない。使者が宮殿をかけぬけることができないということで、知らせが届く可能性がない(あるいはないに等しい)ということを表しているのである。ここで「可能性」ということばを用いたのは、知らせが到着したかどうかという「結果」について、作品では一言も述べられていないからである。使者はいまだに一番内側の宮殿を走り続け、「おまえ」は窓辺でその知らせを待っている。もちろん、読者は結果について全く触れられていないとはいっても、この知らせが届かないことは十分に予測できる。

しかし、ここで強調しておきたいのは、この作品の記述が、厳密な意味で「知らせが届く可能性」のレベルでなされている点である。皇帝の出した知らせをめぐる話ではあるが、記述の焦点は、知らせの内容よりもあくまで知らせが届くかどうかにある。事実、重要だということはわかっている、どういう知らせかは知らされていない。したがって、この物語は、皇帝の出した知らせが届くかどうかという「可能性」をめぐる動いていると言うことができよう。知らせを待つ「おまえ」はもちろん、それを伝える使者、物語の語り手、さらには読者の関心がすべてこの「可能性」の成否に注がれている。

知らせが出た時点で「知らせが届く可能性」が発生する。知らせを待つ「おまえ」はその可能性を前提にしている。そして、使者が宮殿を出ることがないということで可能性が否定されているのである。この関係を図示してみよう。



ここでわざわざ「可能性」ということばを持ち出し、ことさらに強調するのは単に「結果」が物語の中で示されていないためだけではない。この「知らせが届く可能性」は読者の「予測」(Erwartung) と不可分の形で結

びついているためである。この予測とは、われわれがすでに社会生活その他の経験から持っている生起した事柄に対する予見能力をさしている。この予測は、作品理解の根底をなしている。

物語の最初の部分で発生する「可能性」はそのまま読者の「予測」と一致する。第二部で可能性は否定され、そこで読者の予測に変更が生じる（予測がなくなるのではない）。この変更は、第三部に入っても修正されない。この予測の変更は、物語に緊張を与えるが、同時に読者にとっては変更の理由を考える契機になる。すなわち、待合せをしたが、相手があらわれない場合のように、その原因を探るのである。「際限なく続く部屋」「何千年と続く宮殿」といったものは明確な理由としては納得されない。しかも、「待合せの相手」である知らせについても、どういふものか全くわかっていない。読者は挑発されるが、物語全体を見通せなくなってしまう。テクストは自ら可能性を設定し、これを否定しているだけで、これらを統合するような事実は与えていない。これが、カフカの「謎」であり、作品の「わかりにくさ」であると言えよう。

こうした読者の予測を変更させるような否定のしかたは、カフカの他の作品においても認められる。『掟の前』(Vor dem Gesetz) はその好例である。

Vor dem Gesetz steht ein Türhüter. Zu diesem Türhüter kommt ein Mann vom Lande und bittet um Eintritt in das Gesetz. Aber der Türhüter sagt, daß er ihm jetzt dem Eintritt nicht gewähren könne. Der Mann überlegt und fragt dann, ob er also später werde eintreten dürfen. »Es ist möglich«, sagt der Türhüter, »jetzt aber nicht.«

(掟の前に一人の門番が立っていた。この門番のところから男がやってきて、掟の中へ入れてくれと頼んだ。だが、門番は、今は入られるわけにはいかないと言う。男は考えてから、ならばあとでなら入ってもらえるかとたずねた。「それは可能だ」と門番は言い、「でも今はだめだ」)<sup>11)</sup>

ここで問題になっているのは、掟そのものではなく、掟の中に入る許可

である。物語は田舎から来た男が掟の中に入れてもらえるかどうかをめぐる展開する。この男の頼みに対して、門番は「今はだめだ」という巧みな否定を行なう。こうして、物語の最後までこの状態は続いていく。

長編『城』(Das Schloß)においても、否定が大きな役割を果たしている。主人公 K の予測はことごとくはずれ、城についても何らはっきりしたことがわからないままである。このことは、会話の中に特に顕著にあらわれている。『城』の第 5 章で、主人公 K が村長を訪問する場面がある。そこで、村長に「あなたは測量師として雇われたが、私たちは測量師など必要ない」と言われる。

K. war, ohne daß er allerdings früher darüber nachgedacht hätte, im Innersten davon überzeugt, eine ähnliche Mitteilung erwartet zu haben. Eben deshalb konnte er gleich sagen: »Das überrascht mich sehr. Das wirft alle meine Berechnungen über den Haufen. Ich kann nur hoffen, daß ein Mißverständnis vorliegt.« — »Leider nicht«, sagte der Vorsteher, »es ist so, wie ich sage.«  
(もっとも、こういうことについて以前に考えたわけではなかったが、K は似たような答が返ってくることは予想していたと心の中でははっきり思った。だからこそ、すぐにこう言えた。「全く驚きました。これでは当てにしていたことが全部はずれてしまいます。誤解があるんじゃないですか」——「残念だが、ありませんな」と村長は言った。「私が申し上げている通りなのです」<sup>12)</sup>

以上の考察から、『皇帝からの知らせ』における「わかりにくさ」が、作品の行なう「否定」と、われわれ読者の「予測の変更」によってもたらされることを確認した。では、『皇帝からの知らせ』は、解釈不可能な作品となるのだろうか。

作品の細部まで完全に理解できなくても、その中にあらわれたいくつかの特性や要素を強調したり、相互に関係づけを行なうことができれば、作品は比喩として十分に読むことが可能である。その一例をここでは示そう。

皇帝は知らせを出し、「おまえ」は知らせを宮殿の外で待っている。皇帝から「おまえ」に向けられた相互的ではない言わば「一方通行のコミュニ

ケーション」がこの作品の主題である。知らせを運ぶ使者は、一番奥の宮殿の中を走り続けるが外に出ることはできない。われわれが「なぜ、皇帝の知らせは出てこないのか」と問いかけるのも、われわれが求めてきた作品の意味と結びついた問いだからである。上の問いは次のように表現することもできる。「なぜ、作家の知らせはこの作品から出てこないのか」。カフカはこの作品に何かメッセージをこめたはずだという前提が、われわれ読者を、作品の外で「待たせる」のである。作家のメッセージが、作品という作家の「宮殿」から飛び出してくることはないということを知りながらも、われわれは作品に従属し、作品にこめられた真の意味を夢見ている。この「おまえ」の立場はそのままわれわれ読者の立場ではないか。たとえ、「これらのたとえはどれも本当は理解できないものは理解できないと言おうとしているだけ」(『たとえについて』Von den Gleichnissen)であっても、またカフカの「否定」によってわれわれの「予測」が狂わされようとも、意味を求め続ける限りは「待つ」ことになるのである。

Das Negative zu tun, ist uns noch auferlegt; das Positive ist schon gegeben.

(否定を行うことがこれからのわれわれの課題だ。肯定ならすでにある。)<sup>14)</sup>

## 注

カフカの作品については、Franz Kafka Gesammelte Werke Hrsg. v. Max Brod Taschenbuchausgabe in sieben Bänden (Frankfurt/M 1983) を使用し、略記で示し、ページ数を算用数字で表した。

- B Beschreibung eines Kampfes. Novellen, Skizzen, Aphorismen aus dem Nachlaß.
- E Erzählungen.
- H Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß
- S Das Schloß

1) 初出は1919年9月24日、ユダヤ人の雑誌『自衛』(Selbstwehr)で、同じ年の暮、カフカの短篇を集めた『田舎医者』(Ein Landarzt. Kleine Erzählungen)

- にも取められて出版された。
- 2) 1917年3月というのは推定である  
Hartmut Binder: Kafka Kommentar zu sämtlichen Erzählungen. München 1975. S. 218
  - 3) B S. 51 ff. なお「言い伝え」の箇所は S. 59
  - 4) ロラン・バルト『テキストの快樂』(沢崎浩平訳 みすず書房 1978)
  - 5) 登場人物がしばしば固有の名前を持たないこととユダヤ性を論じたものとしては次のものがある。  
マルト・ロベール『カフカのように孤独に』(東 宏治訳 人文書院 1985)
  - 6) 特にシュタインメッツはこのカフカの aber に注目し、予見不可能な事態が発生する箇所には必ず aber があるという意味で、それを「兆候を示す aber」(das symptomatische aber) と呼んでいる。  
Horst Steinmetz: Suspensive Interpretation. Am Beispiel Franz Kafkas. Göttingen 1977 S. 107 ff.
  - 7) E S. 34
  - 8) E S. 43
  - 9) Franz Kafka Briefe an Felice und andere Korrespondenz aus der Verlobungszeit. Hrsg. v. Erich Heller und Jürgen Born. Frankfurt/M 1976 S. 574  
なお、グレーテ・ブロッホ (Grete Bloch) は、フェリーチェの友人で、カフカとの友情もしばらく続いた。
  - 10) Hartmut Binder; Kafka in neuer Sicht. Mimik, Gestik und Personengefüge als Darstellungsformen des Autobiographischen. Stuttgart 1976 S. 559 ff.
  - 11) E S. 120, 121
  - 12) S S. 60
  - 13) B S. 72
  - 14) H S. 61 (1917年11月18日の記述)